「日々の理科」（第 3981 号） 2025,-7,-1

「高知紀行（７）」

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所

田中　千尋　Chihiro Tanaka

この日の夕方に訪れた「柏島（かしわじま）」は、名の通り島なのですが、実際は新旧２つの橋で四国本土と繋がっています。橋で繋がった島は、「島」としての魅力は半減します。しかし、この柏島は行く価値が十分にあり、むしろ橋で繋がっていて自動車で直接行けることが有難いとさえ思いました。

その古いほうの橋から「イルカ」が見えるというので、帰りに寄ってみました。最初はそう簡単に見られるわけないと思っていたのですが、食堂のママさんが「あー、いつもいるよ」と仰るので、それなら見ていこう、となったのです。確かに漁港のある入江のまさに橋の真下に黒いイルカらしき影が２体見えます。

イルカの仲間は哺乳類で肺呼吸なので、魚とちがってずっと水中にもぐっているわけではありません。どうしても、呼吸のために時々水面に出てきます。何分かに１回、確かに水面に出てきます。やはりイルカにちがいありません。

イルカは２頭で、常に一緒に泳いでいました。呼吸の為に水面に上がってくるのも一緒のタイミングでした。私はイルカを水族館でしか見たことがなかったので、とても興奮してしまいました。

この翌日に行く予定の「沖の島」は、宿毛の港からは１時間半近くかかります。しかし実は柏島からは目と鼻の先にあります。実際にかつてはここから沖の島への連絡船があり、３０分で着いたそうです。現在ここから沖の島に行くには、高速船をチャーターする必要があります。沖に見える平らな島が沖の島です。

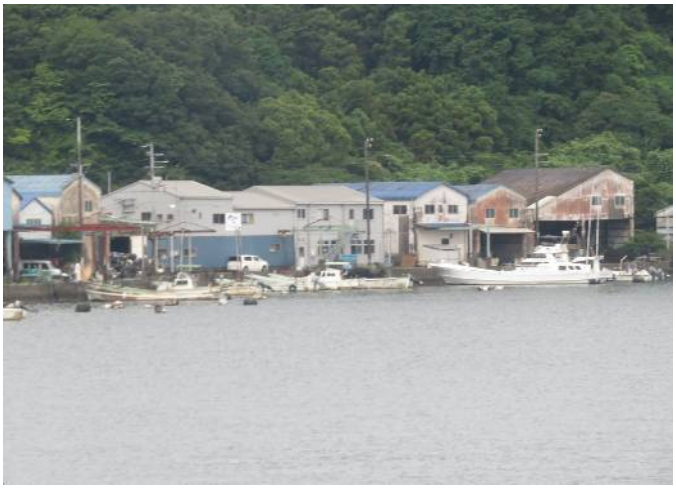
翌朝、その沖の島行きの連絡船に乗船しました。桟橋は、宿毛市の「片島」という港にあります。

沖の島も行政区画は「宿毛市」に属するので、連絡船も宿毛市営として運行しています。１日に２往復、宿毛（片島）→鵜来島（うくるじま）→沖の島（弘瀬）→沖の島（母島／もしま）の順に寄港します。

この連絡船は、人の輸送だけでなく、島の生活に必要な物資や商品、それに郵便物の輸送も担っています。宅急便の荷物も運ばれ、特に離島割増料金はなく、通常の料金で送れるのだそうです。

船内は上甲板（１階）と船橋甲板（２階）に客室があります。座席はリクライニングで快適、横須賀線のグリーン車並みの乗り心地でした。揺れを心配しましたが、この日の海面は池のように静かでした。

船橋甲板の客室からは、屋外デッキに自由に出られます。写真は、屋外デッキから眺めた宿毛片島の港の様子です。



進行左側には海に直接つながった倉庫か車庫のような建物が並んでいます。船舶を修理するような施設なのかも知れません。陸路で行って確かめたかったのですが、今回は時間がありませんでした。

湾の出口付近に浮かんでいる標識を見つけました。これは漂流しているわけではなく、海底と係留されているブイです。夜間に灯台のように明滅するこのブイは、航路標識の一種で「灯浮標（とうふひょう）」といいます。夜間の航路を示す重要なものです。